

越境する哲学教育に向けて — 非哲学科における哲学教育の可能性 —

加藤 泰史

<要 旨>

本稿の目的は、哲学科以外での哲学教育の可能性を掘り起こすために、哲学が本来的に持っている「越境する」機能に定位すべきことを提案すると同時に、ドイツ学科という非哲学科での具体的実践を自己分析して紹介することにある。筆者はもともと南山大学文学部哲学科に赴任し、そこで伝統的な哲学教育に従事していたが、理解不可能な理由で文学部が解体され哲学科が消滅したのにもなってドイツ学科に移籍しドイツ哲学のポストに就いた。たしかにポストはドイツ「哲学」ではあるものの、学生は哲学だけを学ぶわけではなく、その意味で哲学が必修ではないという状況の中で哲学教育を担当することになった。このときに助けになったのが応用倫理学研究であり、日本感性工学会の感性哲学部会での研究活動である。それは哲学の越境する機能を再確認することにもなったが、また同時に異なる学問領域の研究者・実務家との学問的交流を通して、ドイツ学科の学生たちのきわめて多様な問題関心に対応できる学問的素地を形成することにも役立ち、ゼミや講義の中で日常的な問題から哲学的な問いを引き出すことにも有効であった。ただし、課題としてはそうした問題意識を切り開くことをどのように哲学の古典的なテキスト理解・解釈に繋げてゆくのかという点であり、この問題に関しては具体的には課外の読書会などを自主的に開いて対応できているにすぎず、さらなる模索が必要である。

「応用哲学なき純粋哲学は空虚であり、
純粋哲学なき応用哲学は盲目である」

(Reine Philosophie ohne angewandte Philosophie ist leer,
angewandte Philosophie ohne reine Philosophie ist blind.)

1. 大学の変貌と哲学教育

大学のあり方が大きく変わりつつある。今日も新聞紙上には「『呼べば答える』携帯 大学が一役、ドコモの冬春新製品に搭載」といった文字が躍り¹⁾、産学連携が新しい大学の理念として当たり前であるかのように喧伝されているが、それは歴史を知らない者の無知がなせる暴論にすぎない。かつてカントが『学部争い』で力説したのは、大学を「有用性 (Nützlichkeit) の空間」ではなく「真理 (Wahrheit) の空間」として編制し直すことであり、それまで「役に立つ」学問、すなわち、「パンのための学問 (Brotwissenschaft)」が重視された産学連携の空間であったのに対して、真理を探究し国家権力に批判的に機能する「哲学部」を基盤とした空間へと大学を根本的に再編することであった²⁾。カントのこうした大学論はやがてフンボルトなどにも多く影響し、1810年のベルリン大学の創設へと結実する。ベルリン大学をもって近代的大学の嚆矢とするが、原理的に「哲学的」大学なのである。ここには哲学があらゆる学問を統合できるという期待も込められており、それが可能なのは何よりも哲学が「パンのための学問」から最も対極に位置して批判的機能に優れているからでもある。いずれにせよ、カントの大学論以前の18世紀の大学および大学論（たとえば、ミヒャエリスなどの大学論を思い起こせばよい）が産学連携を基礎にして「パンのための学問」を重視した大学構想であったことは正しく認識しておくべきであろう。ベルリン大学創設200周年の現在にあって、現行の大学改革（あるいは、より正確に言えば、大学「改悪」）はカント以前に無批判的に戻って近代的大学以前のアンシャン・レジームに帰ろうとしているにすぎない。

こうした産学連携を志向した大学改革によって大学は産業構造の中に組み込まれ、その結果としてみずからの学問的基盤を喪失しつつあると同時に、当然のことながら批判的機能も弱体化させてゆく。それはまた何よりも大学教育に甚大な影響を与えている。いわゆる「就活」によって授業、特に演習（いわゆる「ゼミナール」）が長期にわたって成立しづらくなった

り、授業改善にはつながりそうもない授業評価という制度の下に公然と窮屈な管理が横行したり（私の知る限りでは、愛知淑徳大学などのように誠実に本気で取り組んでいる大学ももちろん存在する）と数え上げれば切りがない。さらに企業は、かつて自前で行っていた社員教育を余裕のなくなったためにキャリア教育という名前で大学に押しつけているが、この本格的導入などもその典型であろう。「パンのための学問（Brotwissenschaft）」の時代なのである。ところが、面白いことに「Brotwissenschaft」という語彙は『木村・相良独和辞典』には載っているものの、小学館の『独和大辞典』にはもう見あたらない。「Wissenschaft」は本来的に「Brotwissenschaft」なのだというブラック・ジョークのつもりなのだろうか。理解しがたい愚行である。こうした「パンのための学問」の時代にあって割を食う運命となるのが哲学であり哲学部、したがって日本の場合は文学部であることは明白であろう。カント大学論の呪縛から解き放たれたかのように上級学部から再び下級学部へ格下げされるだけならまだしもそもそも存在が抹消されてしまう場合さえある。かくして目先の利益を求め、あちらこちらの大学で定見のない看板の付け替え（多くの場合に情報やら政策やら国際やらの接頭語が付く）や他学部・他学科への移籍が強制的に行われることになる。私自身の場合もその例外ではない。しかし、文学部哲学科から外国語学部ドイツ学科へ移籍してみて気づかされたこともないわけではなかった。デカルトのいう「世界という大きな書物を読み解く」ことである。哲学科時代の私の哲学教育はテキストにのみ向き合っていたにすぎず、その意味でデカルトのいう「世界」に真摯に向き合っていたとは言い難く、特に教育の場面ではそれが顕著であったと今から考えると反省せざるをえない。カントが大学制度の内部で哲学部を下級学部から上級学部へ位置づけ直そうとしたのも、哲学の持つ越境する力を最大限に発揮させるためであったはずで、この越境する哲学の魅力をどれだけ学生や院生に伝えることができたかはみずから問い返さなければならない。移籍は少なくともこの自問のきっかけとなった。もちろんこの問いには正解などなく、その意味でいわば彷徨に似ているだろう。しかし、仮に移籍に意味があったとすれば、この彷徨を本気で続けることができた場合だけである。今回のこの寄稿をその第一歩としてみたい。

本論稿の考察は次のように行われる。まず次節では哲学科時代の哲学教育を振り返ってその特徴を析出してみる。続いて第3節では現在のドイツ学科での哲学教育の現状を分析してみたい。さまざまな問題点とともに、

しかし同時に越境の芽も見出せるのではないかと思う。そして最後にささやかな展望を述べてみよう。ドイツ学科の場合はドイツ応用倫理学の諸問題を哲学教育の中に持ち込むことで「テキストから現場へ越境し、そして再びテキストに帰還する」ことが可能になるのではないかという期待を今は抱いている。

2. 哲学科時代の哲学教育 –テキスト読解のための哲学教育

ここで記録のためにもまずは哲学科時代の哲学教育を整理しておこう。哲学科時代の担当科目は、哲学科の専門科目としては「哲学特殊講義」・「倫理学」・「近世・現代哲学史」・「哲学基礎演習」・「演習（ドイツ語）」・「演習」であり、さらに共通教育科目の「哲学」、そして文学研究科独文専攻ドイツ文化コースの「ドイツ思想」である。「演習」のテキストとして、アーベルの論文・カントの『純粹理性批判』『道徳形而上学の基礎づけ』『啓蒙とは何か』・メンデルスゾーンの『啓蒙とは何か』・ニーチェの『道徳の系譜』・和辻哲郎の『風土』を、1年次生向けの「哲学基礎演習」の場合はネーゲルを取り上げ、そして2年次生向けの「演習（ドイツ）」のときにはデカルト・ロック・ヒュームの有名な著書の重要な部分のドイツ語訳やカントをはじめとするドイツの哲学者の著書の重要な箇所を拾い上げた自家製アンソロジーを作ってテキストとした。それに加えて、自主ゼミを不定期に開いていたが、そこで取り上げたのはカントの『オプス・ポストウムム』・ハーバマスの『公共性の構造転換』・ニーチェの『善悪の彼岸』・シェーンリッヒの論文・オニールの論文であった。演習ではドイツ語原文と翻訳を使い、自主ゼミでは翻訳があるものは翻訳を使用したが、しかし翻訳の全くないテキストにも挑戦した。卒論のテーマに取り上げられた哲学者は、カント・ヘーゲル・ニーチェ・ハイデッガー・ベンヤミン・ハーバマス・ヨナス・ケルケゴール・ハンスリックなどドイツ系が中心であり、テーマとしてはカントの場合であれば「物自体について」とか「嘘について」などであり、ヨナスの場合は「環境倫理学における未来世代の対する責任について」であり、ケルケゴールであれば「倫理性と宗教性」といった具合であった、極めてオーソドックスであった。多少毛色の変ったテーマとしては、ベンヤミンの場合に「都市論」があったり、ハンスリックの場合は「純粹音楽」が論じられたりもした。卒論に取り組む際に原文にきちんとあたる学生は実際には少数派で多くは翻訳だけを使っていたと思う。しかし、全

く翻訳のないベンヤミンのテキストを自分なりに翻訳して卒論を書いた意欲的な学生がいたのも事実である。

哲学科の専門科目の講義内容は良くも悪しくも研究と教育の一体化が実現されていた。それを敷衍するならば、そのときに論文を書こうとしていた問題を講義のテーマに採用してその舞台裏を含めて多少はわかりやすくしていても重要な箇所はときに草稿をコピーして配布し説明して議論するというスタイルをとった。もちろん哲学史の講義などは必ずしもそうではなかったものの、哲学特殊講義は毎年例外なくこの意味での一体化を実行していた。これに関しては恩師たちの手法とほとんど大差ないと言えよう。もっとも研究と教育の一体化という聞こえはいいけれども、現実的には自己満足にすぎなかったかもしれない。しかし、私自身が学生や院生であったころ、講義の中で恩師たちの問題意識の所在が分かるような講義はとても刺激的であったので、そうした刺激を感じ取ってくれた学生も存在したのではないかと思う。当時の哲学科は大学院進学希望の学生を比較的大切にして鍛えるという雰囲気があり、そうした学生にも旧帝大系の他大学をできるだけ受験させるようにし、また受験できるようなレベルまで引き上げることに取り組んでいたので、自主ゼミなどを開いていた教員も私だけではなかったはずである。また、こうした学生が他の学生たちを引っ張ってゆくという構造もうまくできあがっていたと言えるのではないか。実際にこうした意欲的な学生の自主性のおかげで、春のオリエンテーション合宿や夏休み中のゼミ合宿さらには卒論合宿・冬の卒業旅行など学生との交流も盛んであったし、ゼミのコンパなども定期的に開かれていた。

いわゆる共通教育の哲学では経済学部または経営学部を担当することが多く、その場合にはマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』などを意識しながら「近代化」といった問題に焦点を当てることで可能な限り経済学の諸問題と連関づけるような仕方で講義内容を構成していた。

3. ドイツ学科時代の哲学教育

ーテキスト読解の希薄化と現場志向

ドイツ学科は旧文学部の独語独文学科を基礎にしてドイツ史・ドイツ外交史・ドイツ社会学などの専門家にドイツ哲学の私も加えて総勢11名で船出した。しかし、ドイツ学科ではどちらかと言えば、プラグマティックな

雰囲気は支配的でドイツ語の会話能力にかかわる教育が重視され教養言語としてのドイツ語という側面、すなわち、ドイツ語の古典的テキスト読解が等閑にされがちだったので、この点でつねに緊張関係があった。現在のドイツ人同僚のバイアーライン教授とリースラント准教授が赴任するまでこの緊張関係は不毛なまま続いた。しかし、この両ドイツ人研究者の赴任とともにそれもより良い方向で改善されてきたと言えよう。これには科研費などの研究活動に学生を参加させたり、科研費で招聘したドイツ人研究者に学生向け講演や集中講義を担当してもらうという企画が大きく寄与したと評価できる。それが「ドイツ語実習」の新規開設にもつながってゆく。この新たな情況を通してデュッセルドルフ大学の教授たちとの学術交流も交換学生制度もともに非常にうまく回転し始めた。しかし哲学教育に限れば、その内容自体は大きく変えざるをえなかった。特に「演習」の教育内容の変化が大きい。

ここで最初にドイツ学科での担当科目を確認してみたい。ドイツ学科の専門科目としては「ドイツ研究入門」・「ドイツ哲学史」・「文献講読」・「演習」であり、それに学部共通科目の「思想研究の基礎」や共通教育の「人間の尊厳」科目と「ドイツ語講読」などのドイツ語の授業が加わり、さらに新設の人間文化研究科の「研究指導」・「近世・現代哲学」・「宗教哲学特殊講義」を担当することになった。ドイツ学科では哲学関連科目は少なく私が担当している以外には非常勤講師の担当する「ドイツ文化と思想」のみである。

「ドイツ研究入門」ではライプニッツ以降の近代および現代のドイツ精神史を講義しており、勢い哲学者を取り上げるようになった。もちろんゲーテやハイネなどの文学者からモーツァルトやベートーベン、ヴァーグナーなどの音楽家も論じるが、たとえばゲーテの場合であれば文学者というよりはむしろ自然哲学者としての側面を中心に紹介したり、モーツァルトであればそのオペラ作品における市民社会論を取り上げたりしている。以前にこの講義で *Logisches Denken* を身に付けさせるために野矢茂樹の『論理トレーニング』をテキストとして採用したことがあったが、記号への拒絶反応と「ドイツ」そのものとの関連がないという理由で不評であった。「ドイツ哲学史」はドイツの哲学者ばかりでなくデカルトやイギリス経験論の哲学者たちも取り上げながら、前者についてはヴォルフやバウムガルテンなどの小文字の哲学者も扱っているので、8年ほどをかけてデカルトからハーバマスまでを講義するような形態になっている。哲学の専門用語もできるだけ日常語を使って

分かりやすく説明するように努力するとともに、理解できなかった事柄を質問用紙に書かせてそれに答えるようにもした。ところが、それを読んで分析してみると、理解できなかった問題を文献などで自発的に調べてみるといった作業はほとんど行われていないことが判明した。要するにその場で聞いて理解できるかどうかだけが基準となっており、その意味では授業アンケートにある「分かりやすさ」の項目がかえって悪影響を及ぼしているときえ感じられる。つまり、学生をむしろ消費者に貶めるとともに、学生もそれに甘んじるといった悪循環ができあがっているような気がする。それを改善するための特効薬があるわけではなからうが、差しあたりの対応策として、(1)的確な文献をこまめに紹介する、(2)できるだけ議論や質問の時間を確保する、(3)たとえばカントの実践哲学がドイツ連邦基本法にどのように反映されているかなど現代ドイツ社会への具体的影響関係を紹介して関心を喚起すると同時に、哲学の議論が具体的現実をも構成していることを自覚させる、といったことに取り組んでいる。いずれにせよ、抽象的な議論を抽象的な次元のままに放置することは許されず、それを絶えず具体的現実という現場に差し戻すという「応用」的作業ないし授業構造が不可欠なのである。別言すれば、「応用」という要素を加味することで等閑にしがちであった「現場」に関わらざるをえず、また逆に「現場」を意識することで必然的に「応用」を要請しなければならないわけである。これは純粹哲学と応用哲学との関係にほかならない。いわば「応用」ということを通して忘れかけていた「世界を読み解く」という哲学的営為に再会したことになる。このことの持つ意味は意外と大きく射程も長い。それは何よりも哲学的概念の根本的見直しに通底するからである。

この「応用」の問題はさらに「演習」で顕著になる。これまで「演習」では、リッターの論文「風景」・ジンメル論文「風景の哲学」・ボルノウの『人間と空間』・和辻哲郎の『風土』・ハーバマスの『他者の受容』・内田芳明の『風景とは何か』・樋口忠彦の『日本の景観』をテキストとしてドイツの文献と日本の文献とを組み合わせてきた。ハーバマス以外は「Landschaft」を主要テーマとしている。その際に「演習」を「文献購読」と結びつけ、たとえば「文献購読」でリッターの論文をドイツ語原文で読み、その内容を「演習」で議論するという形態をとったりもした。テキスト読解を重視したからである。しかし、現実にはこの「応用」はテキストを通じた概念の見直しといった地平を見出しえない段階にまだ留まっている。たとえば、リッターの論文によってヨーロッパにおける「Landschaft」

概念の成立およびその概念のもとで何が哲学的に問題になってきたのかを学びながら、それがさらに現代においてどのような問題として立ち現れているのかを内田芳明の『風景とは何か』にもとづいてドイツの現状と日本のそれ（日本に関してはさらに和辻哲郎の『風土』や樋口忠彦の『日本の景観』の議論も参照した）とを比較して議論するというスタイルを採用しているが、テキストに立ち戻って概念を検討するという作業には至らずにむしろ具体的現実の問題に議論が偏り始めるという傾向が目立った。その結果が卒論のテーマにも如実に反映することになる。すなわち、「国際児教育－彼らの言語とアイデンティティをめぐって」・「ドイツにおけるユーゲント・シュティール」・「空間の履歴論」・「コミュニケーション場面に見られる日本人の非言語行動の考察」・「音楽美学－ハンスリックの音楽美論を中心に」・「ドイツ人建築家 Ludwig Mies van der Rohe の建築理念」・「『景観』と『街づくり』の考察」・「カンディンスキーの抽象絵画」・「『ツァラトゥストラはかく語りき』より超人思想について」・「CSRの姿－日本、ドイツの企業の社会的責任」・「環境首都フライブルクの姿」・「ルドルフ・シュタイナー－シュタイナー学校における教育法」・「森鷗外の翻訳とナイダの翻訳論」・「フンデルトバッサーの目指した建築」・「戦争関連施設に見る戦後処理」・「平和構築」・「日本とドイツの食」・「アントニオ・ガウディ」・「環境教育と社会、そして人々」・「日本とドイツの都市景観の成立」・「環境先進国ドイツと日本」・「クルマ依存社会から脱クルマ社会へ」・「ブルーノ・タウトの集合住宅」・「3人の明治御雇い建築家」・「風土と地域振興－三澤勝衛の風土論からのヒント」・「ハンス・ベルメールにみる人形愛」・「日本の都市風景」といった具合である。これらのテーマから明らかなように、具体的現実の「現場」から再度テキストの新たな読解へと向かわせることがなかなかできていない（幸いなことに、その兆しのある論文もなくはない）。このあたりが哲学科以外での哲学教育の一つの課題ではないかと思う。ドイツ学科の学生の場合、ドイツ文化やドイツ社会に対する関心を基本的に持っていると同時に、短期なり長期なりでドイツに留学した学生が多く在籍しているので³⁾、こうした条件は哲学的考察に向かわせる上で重要な要素でありメリットとなる。学生が加藤ゼミを選択した理由も哲学そのものを学びたいというよりは設定したテーマに依存していることは明らかである⁴⁾。しかしながら、それにもかかわらずまた同時に「哲学的アプローチ」を学ぶことができていると評価する学生も少なからず存在し、その場合に定義するのが難しい「風景」という概念をさまざまな角度から議論し検討

しているときに「哲学している (philosophieren)」とみなしている。これらの論点から単純には導き出せるわけでもなくいささか我田引水かもしれないが、それでも、(1) ドイツ文化などに関心を持った学生を少しでも哲学に接近させるテーマとして「風景」は有効であり、また「風景」をめぐる哲学的文献なども豊富なので、哲学科以外の学科でも哲学的考察に誘う要素は必ず存在する。したがって、それをどのように的確に設定できるかが重要となる、そして(2) 学科の特徴を生かす必要がある。ドイツ学科の場合、前述したように、留学経験者が比較的多いので、特に日独の「現場」を比較し議論することに関してはそれがメリットとなる。議論のテーマを適切に設定し議論の交通整理をしさえすれば、この「現場」をめぐる「議論」ということを通して哲学的考察に接近させることは可能である、といったことは明らかであろう。実際にリッターの風景論および和辻哲郎の風土論をめぐる批判的議論から三澤勝衛の風土論に行き着いてそれで卒論を書いた学生も存在したことは気休め以上と言えるのではなからうか。こうした内容を指導する上で役に立ったのが日本感性工学会・感性哲学部会でのさまざまな議論である。それらの議論を通して、哲学や思想にも関心を持つ建築家やアーバン・デザイナーといった研究者から従来の哲学・倫理学の枠組みを越え出た知識や新たな動向などに接することが可能になったが、それによってドイツ学科の学生たちの多様な関心——哲学科では哲学・倫理学を学ぶためのカリキュラムになっているが、それに対してドイツ学科では哲学だけを学ぶためのカリキュラムにはなっていないので、当然のことながら学生の問題意識はより多様であり問題関心は多岐にわたる——に対応することができるようになった。特に「風景」ないし「景観」といったテーマを掲げた場合には建築や建築史の専門知識は不可欠となるのでなおさらである。こうしたことは哲学・倫理学系の専門学会や研究会だけではほとんど実現不可能であっただろう。その意味では教員も従来の哲学関係学会の枠をみずから越え出る必要と努力が求められる。

しかしながら、問題はここからどのように再度テキスト読解に、しかも古典的テキスト読解に連れ戻すかということである。あるいは、それを演習に繰り込めるかである。三澤勝衛を発見した学生には三澤の議論に関連させてアレクサンダー・フォン・フンボルトの『コスモス』のある個所をどのように解釈するのかという課題を与えてそれを卒論の中に組み込ませたが、それは希有な事例である。この学生にそうした取り組みを可能にさせた背景にはもちろんその資質もあるが、それと同時に科研費の活動に関

わってシェーンリッヒ（ドレスデン工科大学）・クヴァンテ（ミュンスター大学）・シュトゥルマ（ボン大学）・ビルンバッハー（デュッセルドルフ大学）・ケトナー（ヴィッテン／ヘアデッケ大学）・シマダ（デュッセルドルフ大学）といったドイツの哲学者・社会学者との交流が大きいのではないかと思う。それゆえに、一概には言えないにせよ、学生をこうした学問の「現場」に触れさせることもまた有効であろう。ただし、構造的な問題としてテキスト読解を考えるとすると、実際には演習ではなかなかそこまで難しいので、自主ゼミを開いてみるのが現実的だと現時点では判断している。自主ゼミではカントの『道徳形而上学の基礎づけ』のドイツ語原文と英訳を使用してみたが、少数ではあるが意欲的な学生は何とかテキストに食らいついてきた。

4. おわりに ー暫定的結論

これまで述べてきたように、哲学科以外の学科で哲学教育を行う場合に必須となるのは、そこから哲学的考察を促してそうした考察に繋がるような「現場」を適切に設定することである。しかし、さらに先に進み「現場」を踏まえた「テキスト読解」に至り、少なくともテキスト解釈が思うほど一義的ではなくさまざまな解釈を検討することによってみずからの解釈を練り上げるということをできるだけ志向するためにはやはり適切なアンソロジーが必要不可欠であると思う。海外にはよくできたアンソロジーがたくさん出版されているのに対して、日本の哲学者はこのアンソロジー編集があまり得意ではなく、その意味ではこれはわれわれの課題でもあろう。

注

- 1) 『朝日新聞』2010年11月10日朝刊、34頁を参照のこと。
- 2) 加藤泰史「十八世紀ドイツの大学改革ー“Brotwissenschaft”（パンのための学問）を越えて」、伊原弘／小島毅編『知識人の諸相』（勉誠出版、2001年、156頁以下）を参照のこと。
- 3) 加藤泰史「テキストから現場へ、そして再びテキストへ」、名古屋哲学教育研究会編『哲学教育を考える』（名古屋大学高等教育研究センター、2009年、63頁以下）を参照のこと。
- 4) 加藤泰史「テキストから現場へ、そして再びテキストへ」、64頁以下を参照のこと。